

存中、残り2例はこれら治療で縮小効果がないにも拘わらず、長期生存中でSlow growing tumorの自然経過とも考えられた。

#### 46. Ifosfamide投与時の出血性膀胱炎に対するmesnaの効果(pilot study)

国立がんセンター内科

桜井雅紀, 山崎保寛, 菅 純二  
高橋秀暢, 二見仁康, 藤田次郎  
佐々木康綱, 江口研二  
新海 哲, 富永慶晤, 西條長宏

肺非小細胞癌の症例10例に対して、Ifosfamide (IFX)のphase II Studyを行った。同時にIFXのDose Limity Factorである。出血性膀胱炎に対するMesnaの予防効果についてrandomized studyにて検討した。

結果はPD 2例, NC 8例と有効例はみられなかった。一方Mesnaについては肉眼的血尿がMesna投与により有意に減少したが、膀胱炎にもとづく自覚症状の軽減には不十分であった。

今後も、IFXの抗腫瘍効果およびMesnaの至適投与量について症例をかさね検討を加えたい。

#### 印象記

第83回日本肺癌学会関東部会は、昭和60年6月8日(土)にエーザイホール(東京)で開催された。演題総数は46題で、その内訳は、肺結核と肺癌の合併例2題、腫瘍マーカーのNSEについて2題、良性腫瘍例9題、めずらしい症例13題、胸壁または縦隔の腫瘍5題、診断法5題、治療に関するもの10題であった。演題募集時に、肺または気管支

原発の良性腫瘍例、肺癌の治療などを主題としたためか、多くの良性腫瘍例の報告がなされた。また治療面ではレーザー治療、放射線療法、化学療法などで長期生存の好成績を得た症例の報告、なお新化学療法剤Ifosfamideについての紹介がなされた(国立がんセンター内科桜井雅紀氏)。今後の肺癌の治療には集学的治療の検討が、大いに期待できると思われる。その他興味ある演題としては、胸部腫瘍性病変に対するシユアカット組織生検針の使用経験と題して、新しい生検針について山田啓司氏(東京都がん検診センター)によって発表された。この方法は被検者に対する傷害が少なく、診断率の高いことから、将来広く活用されるものと思われる。

雨天にもかかわらず多数の会員が出席され、熱心に討論が行なわれ、有意義に学会が運営されたことは、会員諸氏の協力によるものと深く感謝している。

(荻原正雄 記)

## 九州支部

### □第25回

#### 日本肺癌学会九州支部会

昭和60年6月22日

福岡市都久志会館

当番幹事 森脇 滉

(九州がんセンター院長)

#### 1. Flow cytometryによる肺癌のDNA-RNA量解析

長崎大第1外科 山岡憲夫

田川 泰, 宮下光世, 原 信介

橋本 哲, 伊藤重彦

吉田隆一郎, 謝 家明

草野裕幸, 岩本 勲, 母里正敏

川原克信, 綾部公認, 富田正雄

Flow cytometryを用い、肺癌24例の手術時標本よりAO染色法にてDNA-RNA量を解析した。Aneuploidyは70.8%で、multiploidyは20.8%であり、DNA量と進行度の相関は少ないが、RNA量ではI期に比しIII期が高く進行度と相関がみられた。

#### 2. 癌性胸膜炎における胸水中TNF測定

熊本大第2内科 吉永 健

西村弘道, 富野新八郎

高月 清

熊本中央病院 衛藤安広

中路丈夫, 木山程荘, 絹脇悦生

熊本済生会病院 赤星一信

中外製薬応用研究所 山本章博

我々は癌性胸膜炎8例にOK-432胸腔内投与し、胸水中TNFの経時変化をみた。活性は注入後2~5時間でピークに達し、24時間後には殆んど消失した。TNF活性と胸膜癒着効果には相関がなかった。

#### 3. 免疫賦活剤封入多糖コーティングリポソームによるマウス肺胞マクロファージの殺腫瘍能活性化の試み